

1-1					
主題	「キラリ・ホット」を活かした記録を充実させ、個別性のあるケアプラン作成に取り組んだ結果とその効果について				
副題	その人が生活の中でキラリと輝き、ほっとする場面に関わりの中で見つけ出しそれを応援していくことが、職員の仕事に対するモチベーションを高める				
キーワード 1	記録の活用	キーワード 2	モチベーション	研究(実践)期間	8ヶ月

法人名・事業所名	社福) 浴風会 特別養護老人ホーム第三南陽園				
発表者(職種)	熊本薫(介護支援専門員)、清水秀則(介護職員)				
共同研究(実践)者	岩本陽子(フロアリーダー)、松上剛(介護職員)				

電話	03-3334-2193	FAX	03-3334-2198
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	杉並区高井戸にある当施設は、定員 222 名の従来型の特別養護老人ホームです。東京ドームの 1.3 倍という広い敷地内は自然が豊かで、ご利用者は四季を感じながら園庭散歩を楽しまれています。職員はご利用者の心に寄り添うサービスを提供しながら個別ケアの実践に取り組み、笑顔あふれる施設を目指しています。				
-------	---	--	--	--	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

第三南陽園 4 階フロアでは介護支援専門員を「専任」で担当。施設サービス計画書(以下、ケアプラン)作成に要するアセスメント情報は、居室担当の各介護職員から主に取得しているが、担当によっては情報が足りず、結果的に目標設定が曖昧で抽象的なケアプランになってしまうことが当初の課題であった。そこで当園ではキラリ・ホット(キラリ・ホットとは、その人が生活の中でキラリと輝き、ほっとする場面に関わりの中で見つけ出しそれを応援すること)を活かしたケアの実践に努め、『キラリ・ホットを活用した関わりの記録例』を全職員に配布し記録の充実を行ってきた。しかしケアプラン委員会にてキラリ・ホットが活用された記録を検証すると、「記録として適切に残らない」「記録の観察ポイントの理解が進んでいない」「職員間でのキラリ・ホットに関する具体的なエピソードの共有が不足しておりアセスメントに反映させるのが難しい」等の課題が浮き彫りになり、更に「職員によっては記録がワンパターンで変化が無い」「ご利用者と個別にゆっくり接する時間が取り難く、キラリ・ホットを活用した記録が出来ない」等の事例も生じていたため、どの様にすればより個別性のあるケアプランを作成し、ご利用者の QOL を高めることが出来るか取り組みを行った。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

キラリ・ホットを活用した記録を充実させ、その記録を活用することで個別性のあるケアプランを作成することを目的とし、次の 2 点を仮説とした。

- ・キラリ・ホットに着目した視点を持つことによって、ご利用者のストレングスに気付くことが出来る。
- ・個別性のあるケアプランを作成することで、ご利用者の生活に対する満足度が向上する。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- 更に分かり易く要点を整理した『キラリ・ホットを活用した関わりの記録例』に更新し、全職員に配布して記録方法の周知を行った。
- フロアと連携しご利用者 1 名に月 2 回程度の個別に関わる時間を設定した。ご利用者が好きなことをリスト化し、レクリエーションやコミュニケーションに充てた。
- 「関わりの記録」がアセスメントに活かせるように、ケアプラン委員会でモニタリングを行った。
- 意見を述べる事が出来るご利用者に『生活に関するアンケート』を研究前と後に行った。
- 職員にも『ご利用者の生活に関してのアンケート』を行った。

《4. 取り組みの結果》

- ご利用者が「何を行い」「何を話し」「どんな表情をしていたか」等、今まで記録されることが少なかった内容が多く記録されるようになった。
- 職員からご利用者に対して「～をすると喜ばれるのではないか」「～なら出来るのではないか」と提案した積極的な関わりが増えて、それにより新たなご利用者のストレングを見出すことができた。
- 関わりの記録が充実したことで、目標設定がより具体的なその方らしい個別性のあるケアプランが作成できた。よりご本人のニーズに沿った関わりを行うことにより、ご利用者の生活に対する満足度が向上したと同時に職員の意欲も向上した。

《5. 考察、まとめ》

取り組みを通じて「ご利用者と個別に接する時間を増やすことが出来たこと」や、「記録の仕方が周知されたこと」により、キラリ・ホットを活かした「関わりの記録」が充実したことで、介護支援専門員と居室担当ケアワーカーとの情報連携が深まり、ご利用者の思いや楽しみをより把握し共有することが出来た。

更にご利用者の笑顔や反応をみる機会が増えたことで、職員の意欲が向上し積極的に関わるようになり、新たなご利用者のストレングスに気が付く相乗効果も見られた。

結果的に記録の充実や個別性のあるケアプラン作成については一定の成果を得ることが出来た。しかし職員からの働きかけに corres pond することが難しいご利用者に関しては、なかなか記録が充実せずニーズを把握しきれない事例もあった。今後も更に生活歴やご家族の話をもヒントにして、ご利用者との関わりに試行錯誤しながら、より個別性のあるケアプラン作成に努めていきたい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究（実践）発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

「生活施設のケアプラン実践」（2005）、森繁樹、中央法規出版

「施設ケアマネジメント 利用者支援とチームづくりのポイント」（2018）、中野穰、中央法規出版

《8. 提案と発信》

高齢者施設では 3 大介護（食事、入浴、排泄）に追われ業務優先となってしまうがちだが、キラリ・ホットの視点を持ち取り組みを行う事で、ケアマネジメントから職員の意識に至るまで変化がみられた。再現性の高い取り組みであると思われるので、更なる普及を目指したい。